

# 近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）の創刊によせて

教養・外国語センター長  
経営学部教授 増田 大三

近畿大学における外国語教育の一層の充実を目途して、再改組がなされました。その経過を簡単に振り返ってみたいと思います。

1991年、大学設置基準の大綱化により、一般教育と専門教育の区分、一般教育内の科目区分〔一般（人文・社会・自然）、外国語、保健体育〕が廃止され、一般教育課程ないし教養部の改組・解体が多く大学の大学で進行しました。

しかし、近畿大学においては建学の理念の1つである「人格の陶冶」を実現すべく教養部を存続していました。他大学の動向や専門教育を重視する学部からの要望もあり、2001年に教養部は改組され、一般教養教育の担当者は学部配属となりましたが、語学教員をバラバラに学部分属させることは、大学全体の語学教育が散漫になることが危惧され、語学教員で組織される語学教育部が設置されました。

以来、9年間、語学教育部は近畿大学の外国語教育を担い、さまざまな改革を企図し、実行してきました。発足時から、学部との連帯を深めるために学部担当教員を決め、各学部における特色ある外国語教育の在り方を検討、全学統一テストの導入と能力別クラス編成、同一教員による週2回の講義、全クラスでのネイティブ英語教員によるオーラルの授業、また、第二外国語の教員は異文化理解の授業ではリレー講義という新しい試みにも挑戦し、大きな成果をあげました。

また、旺盛な研究活動の成果は、「語学教育部紀要」や「語学教育部ジャーナル」に数多くの珠玉の論文が投稿され、近畿大学外国語教員の研究レベルの高さを世界に発信してきました。

そのような語学教育部の努力のなかで、ある意味での学部間競争として、各学部において他学部とは異なる特色ある外国語教育を求める動きが活発化してきました。語学教育部教員と学部教員が話し合う方法では、大学教育変革のスピードが求められる時代には即応できないとの判断のもと、2010年3月に語学教育部を廃組し、4月より外国語担当教員は学部配属となり、配属学部の教育目的を実現するための外国語教育の中心として教育に当たることになりました。

ただ、各学部が特色を打ち出すことは大切ですが、大学全体として統一した外国語教育

のレベルを維持するために、語学教育部の教員を中心に、すでに学部所属になっていた外国語担当教員も参画して、英語マニフェスト、第二外国語マニフェストを作成、このマニフェストで示された教育内容を遵守し、その上で各学部の特色ある語学教育内容を積み上げることにいたしました。

また、組織的には、2001年の教養部改廃に伴い、学長を機構長として設置されている全学の一般教養の改善・改革を企画・立案・運営してきました全学共通教育機構のなかに、新たに教養・外国語教育センターを設け、全学的な外国語教育の向上のための施策の検討・実行にも責任を持つ組織変更を行いました。

以上のような経過で、外国語教員が学部所属になりましたが、近畿大学の外国語教員の研究を広く世に問うために、語学教育部で刊行していました「語学教育部紀要」と「語学教育ジャーナル」、また来年からは英語研究会の「近畿大学英語研究会紀要」をも併せて引き継ぐ形で、「近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）」を創刊することとなりました。

従前の「語学教育紀要」「近畿大学英語研究会紀要」と同様に、この紀要に掲載します論文に対しましても、多くのご批判やご助言をお願いする次第です。